

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A:よくできている B:概ねできている, C:あまりできていない, D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
心も体もたくましい子	「やりたい」を満足するまでとことんやる	自分から周りの人・もの・ことに関心を持ち、遊んでいる 思ったことや感じたことを自分なりの方法で表現している 自分からやりたいことをみつけ、「おもしろい」「明日もやってみよう」という気持ちをつなげている	○園庭の環境図をもとに遊び出しの環境を考えたことで、子どもたちが主体的に遊ぶ姿や、様々なもの・ことへの関心の高まりがみられた。友達や異年齢の遊ぶ姿を見て真似したり、仲間に入れてもらったりしている ○子どもの表情やつぶやきから子どもの思いを捉え、丁寧に関わることで一人一人が安心して自分の思いを表現するようになった ●まだ表現方法がわからず思いを十分に出不せない子もいる ○楽しかったことを可視化の掲示や子どもたちと一緒に遊びを振り返り「今日はこれで遊ぶ!」と意欲をもって登園する姿が見られた ●失敗すると諦めてしまう姿や環境の再構成が不十分で思いを実現できない場面があった。子どもの発達や興味に合わない環境では、遊びが継続しにくいこともあった	A	A	・0歳から子どもの「見る力」が育まれている。異年齢で刺激を受け合い、園での学びが小学校につながる。 ・今、小中学校とも主体性を大切にしている。職員も子ども自身が主体であることや自分がどうしたいという思いを大切にしてほしい ・運動会後、年長児のバルーンに憧れて年中児と一緒にやるなど遊びの継承がされているところに、集団や異年齢の良さがある	・0歳から安心できる環境の中で、自分の思いを保育教諭に受け止めてもらう経験の積み重ねを継続していく ・子どもと一緒に遊びの振り返りしながら明日の子どもの姿に見通しをもち、タイミングの良い環境の再構成をしていく ・子どもの発達をおさえ、その姿に合った環境を構成し成功体験が積み重ねられるようにする。できた姿を認めその喜びに共感しながら、自信を高めていく

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	一人一人の発達や成長を捉え、職員同士がコミュニケーションをとりながら、他学年や乳児幼児がつながりのある教育・保育を実施している	○月反省のエピソード研修を通して、各歳児の子どもへの育ちや子どもが面白いと感じていること、次月の教育保育について共通理解することができた ●『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を捉え、それぞれの時期から意識していくことが不十分だと感じた	B	B	・保育教諭自身が主体的になることを意識し、思いや願い、子どもの伸ばしたいことを職員間で情報共有をする ・環境は与えられたものだけでは、子どもたちの発想や力は育たない。子どもと一緒に環境を作り何をしたいのか見つけていく	・就学前までに育てたい姿に近づけるように園内研修時に各歳児の発達を職員間で押さえ、それに応じた教育・保育を行っていく
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の生活やリズムに合わせ、安心して過ごせるようにしている	○送迎時に保護者とコミュニケーションを取り、1人1人の健康状態を把握し無理なく過ごすことができた ●早番遅番の室内環境について、子どもの様子に合わせて見直しをすることができない時もあった	B	B	・保育教諭が余裕をもっておおらかに見守ることで子どもの可能性が見えてくる。子どもと一緒に楽しんで関わってほしい	・早遅番の分掌が季節ごと早番遅番の環境について話し合いをし、職員に共有しながら環境を改善していく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもたちが満足するまで、遊べるような環境構成の工夫をしている	○個々に合わせた環境や遊び出しの環境を職員が意識して工夫をしている ●時差出勤のため、環境を設定する時間や担任間で子どもの姿や遊びの情報共有ができず、環境の見直しが難しい時もある	B	B	・事故やケガがゼロが理想だが、現実的には難しい。怪我をしないために大事なことはひとつではないが、子どもの自己防衛力、自己管理能力等を高めてほしい	・午睡や夕方に担任間で子どもの姿を情報共有し、見通しをもった計画を立てる。また子どもと一緒に通しに環境を体感させていく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	あと一步で事故になるところだったというヒヤリハットした出来事を記録、分析、改善策を職員間で周知し、事故防止対策をしている	○毎月のヒヤリハット、それに対する改善策を職員会議や朝の打ち合わせ時に共有することで、職員の安全への意識が高まった ●大きなケガは少ないが、首り上のケガで病院に行くことが多かった。子どもが転倒時に手が出ないこともあるが、職員がケガにつながりそうという見通しの甘さがある	B	B	・小学校では経験できない取り組みがあることが良い。子どもの頃の味覚や実体験は大人になっても忘れず、生きていくための基礎となるため、今後も大切にしていきたい	・子どもがケガを体につくりをサーキット遊びや鬼ごっこ等で育んでいく。また、子ども自らが危険を察知する力を身に付けられるよう、安全教育を実施する
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	食に関わる経験を取り入れたり、食べることを楽しむ工夫をしている	○毎月の食育活動の中で、噛む大切さやお茶の飲み比べをする等、実体験を通して楽しく学ぶことができた。蒲原の特産品の削り節やお米の育て方を地域の方から教わる経験もして、食への関心が広がってきている ○自分たちで栽培した野菜を給食室と協力してクッキングをしたり、保育教諭自身が楽しく食べる姿を見せたりしている	A	A	・専門機関と連携し、子どもの姿や発達を共有し支援することができた ●子どもの姿が日々変化しているため、対応や職員間の共有の難しさを感じた	・引き続き、野菜の栽培やクッキング、食育を調理員と一緒に実施し、子どもたちの食の関心を高めていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	必要に応じた専門機関と連携を図りながら、職員間で個々の理解や丁寧な関わりをしていく	○専門機関と連携し、子どもの姿や発達を共有し支援することができた ●子どもの姿が日々変化しているため、対応や職員間の共有の難しさを感じた	A	A	・子どもの様子を職員間で共有することが難しい点は課題と捉えるのではなく常に気をつけて発信していけば良い	・2ヶ月に1回、様々な時間帯で関わる職員も含め、会議で気になる子の様子や支援方法等を共有していく
5 組織運営	(1)組織体制の充実	園務分掌を各自意識して、企画計画に基づき遂行し、職員が協力して教育・保育を進めている	○園務分掌を各自が意識し、分掌リーダーを中心に企画・計画に基づき業務を責任もって遂行した。また、職員が協力して教育保育を進めている ●業務の偏りや正規中心の進行になってしまふことが課題である	A	A	・分掌に会計年度任用職員も加わることで、当事者意識が強くなっている。継続して取り組んほしい	・定期的に分掌会議を行い、正規以外も見通しをもって取り組む。進捗状況を可視化し担当以外の分掌も意識できるようにする
6 研修	(1)研修体制の充実	研修テーマ『「面白い」を支える援助』に向けて、保育実践と研修を行っている	○園内研修では、研修テーマに沿って個に焦点を当てたエピソードを出し合い、見取る力をつけてきている ●見取った後の環境作りや関わりなどすぐに実践できない事もあり、日々の手立を意識して保育をしていく必要がある	A	A	・月反省では、記入用紙の内容を改善し保育教諭が子どもに対する思いや願いを共有して充実している	・見取った後の環境や関わりを日誌に記入し分析したり、お互いにアドバイスやヒントを伝い合える機会をもち「チーム蒲原東部」として学び合っていく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	備品、教材、素材等の配置、保管、点検を適切に行い、日頃から教育・保育環境の整備に努めている	○子どもの遊びの様子を見ながら必要な物をさりげなく用意したり、使わない物を片付けたり環境を整えている ●教材庫や倉庫の元のあった場所に戻していないことがあり、用具が出しにくくなっていたり、教材が揃っていないこともあった	B	A	・保護者アンケートではAの評価が多いため、子どもにとっては良い環境作りができていた	・教材等の補充の係を決めて実施する。係以外の職員も足りなくなった物を報告したり片づける場所を視覚化し、使ったものを戻す環境を作っていく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	子どもたちの遊びや生活の様子、園の取り組みなどを保護者にわかりやすく伝え、子どもの育ちを共有している	○コドモンでのドキュメンテーションや連絡帳で子どもの遊びの姿や保育教諭の思い、また送迎時にも子どもの様子を伝えている ●配信を見ていない家庭もあるので、手紙等の配信をする時は、お知らせする声をかける等、配慮が必要だと感じている	A	A	・保護者と直接対話できることが園の強み。保護者が連携がとれないと感じているところを対話の中で探っていく	・コドモンだけではなく、面談、参加会等の保護者と顔を合わせる機会に子どもの様子を伝える
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	自分たちから積極的に近隣の小学校や公私立園との交流を図り、意見交換を行っている	○年長児は蒲原東小1年生、蒲原学園の友達との交流を行い、子ども同士が関わる場を作ることができた ○蒲原東小とは公開授業・公開保育での交流やアプローチカリキュラムの話し合いを行い、スムーズな接続ができている	A	A	・今年度は蒲原東小学校との交流がたくさんできた。来年度も先生同士のつながりをもち、お互いが学ぶ機会がより多くなると良い	・園の隣に小・中一貫校ができるので、その立地を生かして、気軽に校庭や校内に遊びに行かせてもらい、職員も子どもも顔見知りとなるようにしていく
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域の方や自然に触れる機会をもち、地域に親しまれる園になっている	○児童館の作品展に参加したり、地域のパン屋に向かうなど積極的に周辺地域との交流の機会をもっている。S型サービスでは幼児だけでなく乳児クラスも地域の方々ともふれあいを体験できている ●散歩に行く機会が少なかったため、地域にどんな自然があるのかをもっと一人一人が知り、計画を立てていきたい	A	A	・S型サービスに子どもたちが来てくれて、地域の方がとても喜んでるため継続して気をつけてほしい	・散歩に行つて気付いたことや見つけたものを散歩マップに付け足していき、情報を進化させて共有する ・園周辺のことについて職員が学び合う機会を園内研修などでつづけていく